

本雑記 § 203 で発表したように筆者は *Usnea chrysopoda* と *U. bayleyi* を同一種に併合し其内容物の差異で之を 3 種の subspecies に分割した。従て是等の亜種を区別する為には顕微化学的の操作が必要である。之を略記すると次の通りである。

*Subsp. chrysopoda* は地衣体の表面が清潔な黄色を呈する、その少量の枝条を丸めてミクロ浸出管に入れ冷ベンゼンを注加し暫時振盪すると純黄色の液を生じ、これをスライドの上に広げて蒸発乾涸して生ずる粘稠のエキスをかきとり別のスライド上で G.E. を加へてカバークラスで覆い加熱して再結晶するとウスニン酸の長板晶とユーミトリンの顆粒晶が出る。

*Subsp. septentrionalis* の冷ベンゼン浸出液は暗紅色を呈しその蒸発残渣を G.E. から再晶すると先づ暗褐色の放射性簇晶（所謂 *materia rubra*）が先づ出現し、その後にウスニン酸とユーミトリンの結晶が析出してくる。

*Subsp. bayleyi* の冷ベンゼン浸出液は紅色を呈し、その蒸発残渣を G.E. から再晶するとウスニン酸とユーミトリンの結晶が主として析出するが同時に *materia rubra* の簇晶も出現するが其量は *subsp. septentrionalis* に比べれば遙に少ない。その多少は赤道を遠ざかって北上するに従て増加し、台湾でも已に *septentrionalis* に近いものがあり日本内地やヒマラヤ産のものは殆どすべてが *septentrionalis* に属する。

「ユーミトリン」は最近柴田教授及協力者によって其構造が決定された。先に布<sup>5)</sup>はユーミトリンを A と B との二種に分離したが柴田教授及其協力者は布の A を A<sub>1</sub>, A<sub>2</sub> とに分離し、これと B をとを合せて三種のユーミトリンの構造を前記の如く決定した。これによるとユーミトリン類は絲状菌の代謝産物 *skyrin*, *rugulosin* 又は *flavobescurin* 等によく似た重複アントラキノール又は重複アントロノ誘導体である。尚此のユーミトリンを溶出した地衣体をエーテルで冷浸しその乾燥残渣を集めて G.E. から再結晶するとバルバチ酸とカペラット酸（又はプロトリヘステリン酸系の脂肪酸）が出る。最後に残った地衣体を熱アセトソで抽出し、その溶液をスライド上で蒸発し残渣を検すると多くの場合 ノルスクチゾ酸（サラチノ酸含有）であり稀にプロトセトラール酸が現われる。

---

□A. S. Hitchcock : *Manual of grasses of the United States.* 2nd ed. revised by Agnes Chase in 2 Vols. Dover Pub. Inc., New York. Each Vol. \$ 4.00. 5×24 cm. この本は有名なヒッチコック氏の北米合衆国のイネ科植物の便覧で、1935 年に出版されたものを、1950 年に Agnes Chase 氏が改訂した覆刻版で、1950 年版そのままである。今日ではそれがたやすく入手できないか、できても高価なためか、とにかく流行の覆刻版として出たものである。内容には全く手を入れないので 1-569 頁までを 1 卷とし、570-1051 頁までを 2 卷として全 2 卷の形式をとったものである。表紙は厚紙であるが製本は堅牢であるから使用に便利である。

(久内清孝)